2009／夏
季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

―越前和紙への提言―

■阪田 美枝（さかた よしえ）
同志社大学文学部卒。幼い頃より長唄に親しみ、吉住流二代吉住小美野を襲名。同志社女子大学職員を経て、全国の紙漉きの里を訪ね、長年にわたって紙漉き唄を収集。1992年、歌詞・楽譜・解説・CD付の和綴じ本「日本の紙漉き唄」を竹尾研究所より出版し、高い評価を得る（大蔵省印刷局朝陽会第一回受賞）。1999年には「定本・日本の酒造り唄」（チクマ秀版社刊、CD付）を発行。その年の日本酒造組合の「日本酒大賞功労賞」を受賞した。現在「日本の木遣り唄」の収集に着手している。法人同志社理事、2000年紀和紙委員会・全国手すき和紙連合会事務局長。

■阪田美枝さん（日本のしごと唄収集家）「紙造りを支えてきた名もない人達の唄」

●長唄「加美の里」との出会い

私は京都の鴨川沿いの古い旅館の一人娘として生まれましたが、幼い頃、おばあさんがよく和紙のおひな様を一緒に作ってくれました。大きくなってあのおひな様を又作りたいと考え、イメージする材料を探し歩いたのですが、なかなか見つからず、最後に行った紙問屋のご主人から「そんなら、自分で漉かはらな、あきまへんなあ」と言われ、なんと阿波まで子連れで紙漉きの修行に行くこととなったのです。それから段々和紙への関心が大きくなってきた頃、大学の図書館研究会で習い覚えた紙漉き作業をご披露することになりました。研究会の資料作りのため、同志社大学の図書館書庫で調べ物をしていたら、表紙に「長唄・加美の里」と印刷された小冊子が目にとまりました。上島新七作詞、稀音家六治作曲とあり、歌詞も書いてありました。六才から長唄のお稽古は続けていましたが、「加美の里」という曲は師匠も聞いたことがないと言われます。糸をたぐるように唄の出自を探っていくと、紀元二六〇〇年（昭和十五年）に岡太神社の「御開帳」に奉納されたことが分かりました。でもそれ以降何の記録もなく、どんな節回しだったのかも分からず、この唄は消えていったのです。それまでにも全国津々浦々に手漉き唄が伝わっていることを知るようになっていましたから、この「加美の里」のように、すばらしい唄が消えてしまわないうちに残しておかねば、という思いに駆られたのです。まさに私の原点の場でありました。カメラ、録音機、ビデオなどを持って手漉き唄収集の行脚を本格的に開始したのは、確か一九七〇年くらいだったと記憶しています。

●唄の採集

唄を記録しておこうと思っても、こういう唄は、歌詞はあるけれど、唄える人がいるかどうかも分からないのです。また産地にはご年配の方が多く、唄える人も年々少なくなってきているので、時間との競争のような気がしました。結局あしかけ三十年間で、全国百ヶ所の紙漉き唄を録音し、最終的に八十六曲をCDに収録しました。「そんな唄ここにはないよ」といわれても、二度、三度出向くうちに、ふと口をさして唄が出てきた佐賀県の唄が収録した最後のものになりました。磯節の節に合わせたその唄には、その地方の紙漉きの場所が唄い込んであったのです。地元の人さえ知らなかった歴史を掘り起こす貴重な資料となり、五十年ぶりに唄ったというそのおばあさんは「死に土産ですわ」と涙をためておられました。

昔の紙漉きの仕事は私達の想像以上につらい仕事でした。歌詞の中には、「紙漉きの仕事で苦労して髪が抜けた」とか、冷たい川の流れで楮を足で踏む作業の効率を考え、つま先だけしかない半分の草履（半じょり）をはいた、などという唄もあり、「悲しくてよう唄わんわ」といった方もいらっしゃいました。私もこの歌詞を見るたびに、胸に込み上げてくるものがあります。

収録した唄は、その日の気候や気分にもより微妙な節回しになりますので、節を区切らず、全曲ハ長調といった目安になるような譜にしてあります。

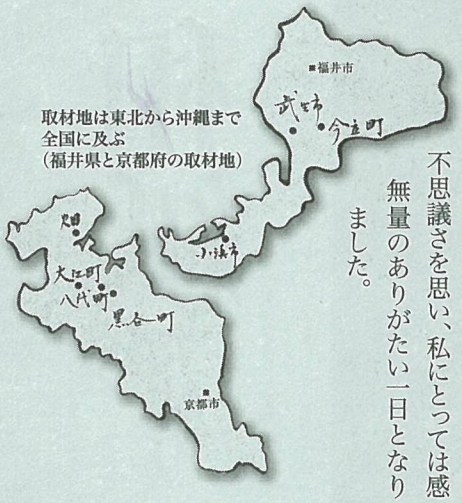
●「紙縁」が教えてくれたもの

私は唄の採集で、気持ちが素直に表された、飾り気のない、静かで、清水が湧き出てくるような、自然に聞き入ってしまうような珠玉の言葉とも出会いました。ともすると、私達は、先達にどんな苦労があって、どんな風にして繋げられたかの現実を知らずに、机上の学問だけで文化を語りがちです。文化が肉体になっているからこそ、紙漉き唄の言葉は美しく、今の時代にはこの様な言葉は生み出せないのかもしれません。出来上がった本を持参し、全国へのお礼の旅が続きました。再開の喜びを分かち合えた方もありますが、多くの方が幽明境をされていました。その方々のご冥福を祈り、東大寺のお水取りの声明をCDの最後に入れさせて頂きました。その折の和上・守屋弘斎法師から「体解大道」という声明の一節を教えていただきました。「頭でなく身体で覚えるということが生きていくことの基本である」という思想だそうで、私の座右の銘になりました。

見返しは生家の観世楼に因み、「観世水」模様。
唄ってくれた人の自著と産地の手漉き和紙が綴じ込まれている

5月4日、式年祭（御開帳）に長唄「加美の里」を奉納

勤務先は六十五歳定年でしたが、一九九九年、五年早く退職し、十年間ボランティアで『和紙總鑑』全十二巻の編集に取り組んできました。全国を巡って唄を集める時、いやな顔をされたことは一度もありません。この「紙恩・紙縁」のお陰で、もう家業はたたんだのに、紙を漉いてくださった方もあり、実物紙を一〇七〇点入れることが出来ました。先年、越前今立へ全原紙を寄贈のため訪れた際、その席上で紙祖神「川上御前がのりうつってはる」といわれました。（笑）。先日の三十三年ぶりの岡太神社・大瀧神社、第三十九回式年大祭・御開帳で神と紙の郷に舞う千三百年の時空を寿ぎ、長唄「加美の里」、及び和楽による新作能「楊貴妃」を奉納させて頂けたことは、導かれたご縁の不思議さを思い、私にとっては感無量のありがたい一日となりました。



取材地は東北から沖縄まで全国に及ぶ（福井県と京都府の取材地）

取組紹介

■越前メイドで「座る暮らし」を提案 マルイチセーリング株式会社

マルイチセーリング（株）専務取締役 小林一朗さん

URL: http://www.01-s.co.jp

一九七四年創業のマルイチセーリング（株）は、ソファを中心とするオリジナル家具の製造メーカー。合成皮革のカジュアルソファの分野では、国内トップシェアの約四十％を誇る。同社はここ最近、フランクフルトの「アンビエンテ」、ミラノの「ミラノサローネ」などの人気インテリア見本市出展をバネに、本格的に海外市場を意識した商品開発に力を入れている。専務の小林一朗さんにお話を伺う。

●歩み

もともと大阪で船舶の椅子張り職人をしていた一朗さんの祖父が、疎開していた実家の越前から大阪には再び戻らず、椅子張りや家具の製造を始めたのが、一九五〇年だという。養子に入った父の代になると、「これからはいいものを作っているだけではものは自然に売れない時代だ。営業にも力を入れなくては」と滋賀県や京都へも足を伸ばし品物を売り込みに行った。その折、京都のある家具店の店主に「どうせ持ってくるなら自分の所でしかできないものを持ってこないと意味がないよ」とアドヴァイスを受けた。爾来自社開発力を高めることを念頭に置いてきた。家具の大半が木製だった時代に、鉄の技術に詳しかった現社長・父の小林幸一さんは、ソファフレームに鉄を使おうと思い立った。鉄ならば気候の違うところに搬送しても木のように湿気で狂いが起こることも少ない。メカ的にも工夫が出来る。改良を重ねたソファにはC鋼にコイルバネ構造を採用、広い座面と丸いクッションを組み合わせた。こうして一九七七年、最初のヒット商品となった「ミニブリスク」というソファが誕生した。

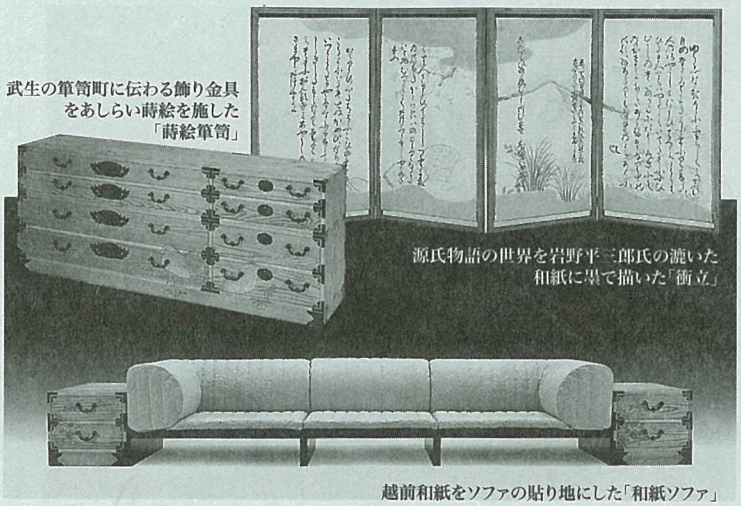
●「床に暮らす」提案―ジパングの誕生

開発部署は「ミニブリスク」の次の商品開発のヒントを探るため、ソファを買った人の生の声や実際の使い方を聞こうと市場調査に乗り出した。販売店から買ってくれたお客さんの住所を聞き、社員が一軒一軒訪問して使い方を聞いた。その結果、多くの客が座面に腰掛けるのではなく、座面を背もたれにして床に座っていたことがわかった。この実態調査を元に開発したソファが、八一年発売の「スキップ」だ。日本人の暮らし方に合う「フロアライフ」を提案した。当時は家具屋さんに持って行っても「そんなの椅子じゃない」と言われ、すぐには売れなかったが、その斬新な価値に気が付いたのは女性だった。婦人雑誌に掲載した広告を見た人が近くの家具屋さんに「スキップというソファを扱っていますか？」という問い合わせが徐々に増え、「フロアライフのマルイチ」の知名度が上がった。当時、日本全国の殆どの家具店にスキップは並んだという。

一九八三年には、東京の企画会社のプロデュースで「ジパング」というブランドを発表し、国内外の話題を集めた。その後も「床に暮らす」をキーコンセプトに、ソファ以外の商品も充実させ、トータルコーディネートで生活シーンを提案。クリップ、フランドルなどの商品を世に出し続けた。

●越前の技術を活かして

二〇〇七年には、経済産業省が中小企業の輸出促進のために立ち上げたプロジェクト「sozo_comm」にノミネートされ、本格的に海外市場を意識した商品作りに乗り出す。世界で一番人の集まるミラノサローネ出展のために、ジパングの立ち上げから関わってくれたデザイナーと相談し、改めて越前のものつくりを活かした開発に挑戦した。越前には、千五百年以上前から中国・朝鮮の最先端技術が伝播し、越前和紙、越前塗り、打刃物、越前焼などの脈々と受け継がれている技術がある。開発した商品は、越前和紙をソファの貼り地にした「和紙ソファ」、十二単衣から着想した「式部ソファ」、源氏物語の世界を岩野平三郎

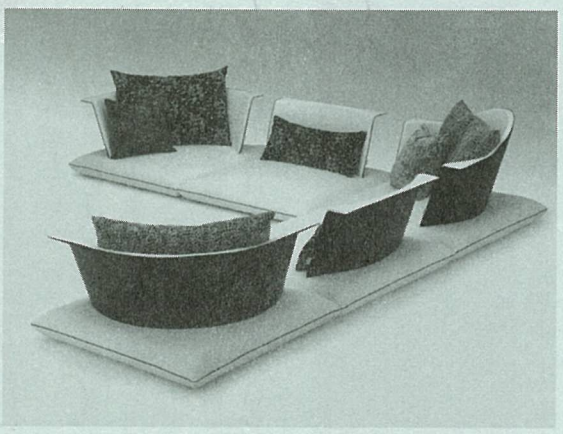


武生の箪笥町に伝わる飾り金具をあしらい蒔絵を施した「蒔絵箪笥」

源氏物語の世界を岩野平三郎氏の漉いた和紙に墨で描いた「衝立」

越前和紙をソファの貼り地にした「和紙ソファ」

氏の漉いた和紙に描いた「衝立」、武生の飾り金具と蒔絵を施した「蒔絵箪笥」、朱と黒の乾漆仕上げの「乾漆机」等で、国際的スタイルとしての「和」を前面に出した。「和紙ソファはミラノで反響ありましたね。お客さんは触った瞬間に、皮でもない布でもない感触なので、あれっと思うらしく、和紙と知って驚いていました。保温性、通気性、リサイクル性を備えた和紙は、向こうの方には新鮮な素材と映ったようです。皆さん新しい素材を探していることが分かりました」



今年発表した「凛ーRIN」シリーズのソファ

二〇〇八年のミラノサローネでは、和テイストを前面には出さず、よりこなれた形で「床に暮らす」を「凛ーRIN」シリーズで表現。初日から引き合いもあいつぎ、実際の商いに結びつきつつある。「日本の市場は単一民族のせいかトレンドが単一になりがちですが、世界市場は客の好みの幅も広く多様性があります。そういう意味で和紙を始めとする越前の素材をもっと面白く提案できると思っています。」と専務は意欲的だ。

和紙ミニコーナー

■越前和紙で「こしの都お買い物券」発行

福井県和紙工業協同組合は、定額給付金の支給に合わせて、各地の自治体が地域消費の活性化をねらい企画しているプレミアム付き商品券の用紙に、越前和紙を使ってもらおうと、宣伝用ダイレクトメールを今春二月九日、全国の市町村、問屋、印刷業者に発送。DMには、PRチラシと透かし入り商品券の見本が添えられた。

日本の紙幣用紙の歴史を作った越前和紙は、品質と透かし技術の高さで、永年株券用紙に利用され、一時期そのシェアは九割以上を誇ったが、本年一月から始まった上場企業の株券電子化により、受注が激減。生産高は、一九八九年度の約半分に落ち込んだ。この窮状を打破しようと、株券用紙メーカーや組合員有志、和紙組合が意欲的にこのプロジェクトに取り組んだ。プリンター技術の発達で高度な印刷が手軽にできるようになった昨今、透かし技術は偽造防止にも役立ち、地域の注文に応じてオリジナルの図柄を入れることもできる。

早速、地元の武生商工会議所では、越前市の支援を受け、市商工会と共に、「越前市プレミアム付買い物券（愛称ーこしの都お買い物券）」の採用を決定し、三月二十日から販売を開始した。越前市内で使用できる菊模様の透かし入り共通券は、五百円券の冊子になっており、一万円で二〇〇〇円分、小売店専用のプラチナ券は二五〇〇円分の買い物ができ、さらにお得。又、地元の秋のイベント「たけふ菊人形」や「和紙の里」などの観光・文化施設でお買物券の表紙を提示すると特典も付く。発行総額三億円となったこの券の有効期間は、三月二十日～八月三十一日となっていたが、発売からわずか五日で完売。地元商店街では「得・得セール」などの取組みを行い、商店街の活性化に一役かった。和紙組合では、その後、さらなるDMを全国に送ったところ、福井県大野市、大分県由布市、玖珠（くす）町からの受注に成功。山田益弘組合理事長は、「通常用紙の二倍するのがやや問題ですが、今後、自治体のユニークな取組のツールとして、また、NPO等が主宰する地域通貨などにも、利用して頂けるといいのですが・・」と抱負を語った。

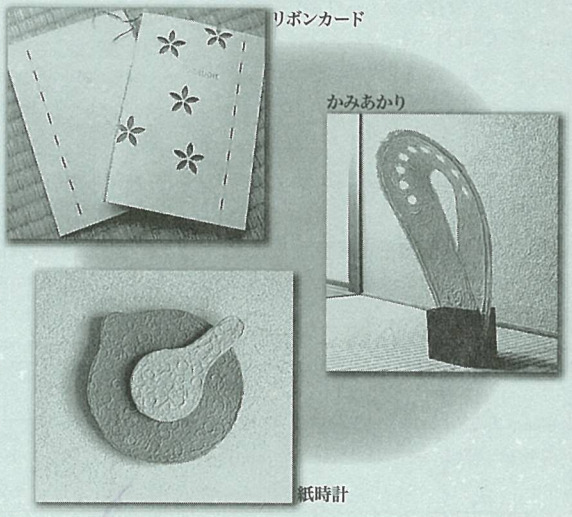
こしの都お買い物券のチラシ

お買い物券

■「素の紙」ブランド商品発売

漉き場独自の技術を活かした新規和紙の開発とその用途開発を目的として、二〇〇四年から福井県和紙工業協同組合が企画・運営している「素の紙展」は、毎年秋に東京でも開催されるようになった。この展示会から生まれた作品に改良を加え、このほど三商品を「素の紙」ブランドとして、二〇〇九年春発売開始。商品は、三月十八～十九日、ファッショナブルエリアとして人気の高い東京・青山の福井県アンテナショップ「ふくい南青山291」主催のバイヤー招待会「ふくいビジネスマート商談会」（工芸部門）にて展示された。

展示された商品は、LEDを漉き込んだ手漉き和紙のアクセント照明「かみあかり」、リボンを漉き込んだ結婚式招待状のセット「リボン・カード」、手漉き和紙を時計の時針と分針にした文字盤の無い時計「紙の時計」の3種類。



リボンカード

かみあかり

紙時計

どの商品も、越前和紙ならでは技術とデザインが活かされており、漉き場と組合が協同で企画、製造を行ったもの。

越前和紙は証書や襖用紙など多彩な紙を抄造してきたが、近年は売り上げの減少が続いている。産地で漉かれた紙の多くは、いくつかの

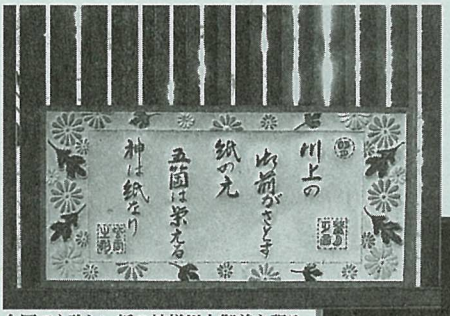
問屋を通して販売されているが、紙を漉く現場では自分たちの紙がどのような用途で、どのような客に使われているのかなかなか把握できず、エンドユーザーの反応を聞く機会も少なくなってきた。そこで、和紙組合が直接小売店に卸す「もうひとつのルート」を新たに確立することで、客の声をダイレクトに紙漉き場に伝え、商品開発に活かす仕組みとしても「素の紙」ブランドを活用しようと計画している。

会場の様子

二日間の商談会には、和紙を含め出展企業十七社六十三アイテムが参加。東京のショップバイヤーも多く訪れ、来場者数は八十二人にのぼった。「素の紙」ブランドは、産地の新たな取り組みとして注目と期待が集まっている。

■三十三年ぶりの式年大祭賑わう

県の無形民俗文化財にも指定され、ゴールデンウィーク期間中に毎年開催される「和紙の祭り・神と紙のまつり」は、今年は三十三年に一度の御開帳(式年大祭)で賑わった。紙祖神・川上御前をお祀りする岡太神社・大瀧神社の式年大祭は、養老三年(七一九年)から数えて三十九回目となり、千三百年にわたって受け継がれてきている。五月二日、奥の院より御輿でご神体を迎える「お下り」に始まり、三日は、色とりどりの袈裟を着た僧が法華経について問答するという祭事「法華八講」、四日は、紙能舞・紙神楽・能・長唄・紙漉き唄などの奉納、最終日五月五日には、子供達による「浦安の舞」奉納、五箇地区を廻る渡り御輿の後、クライマックスのちょうちんを掲げた幻想的な神送り「お上がり」の儀式が行われた。



全国でも珍しい紙の神様川上御前を祀る

「英語でしゃべらナイト」より

又会期中、大掘り出し市・バザーや屋台・よさこいイベント(於和紙の里広場)、和紙帽子作り(於卯立の工芸館)、日本折り紙会館館長・小林一夫氏によるおりがみ教室(於生涯学習センター)、越前和紙の歴史を観る古文書と古紙の展示(於紙の文化博物館)など、多彩な催しが満載。紙の里の特別な祭りを味わおうと多くの人が詰めかけた。祭りの模様はNHK教育テレビの人気番組「英語でしゃべらナイト」スペシャルにも紹介されました。

情報欄

●イベント情報

■流し漉き体験
時:2009年7月9日(木)
場所:卯立の工芸館(越前市新在家町)
岡本小学校5年生のためのワークショップ

■越前市小学生卒業証書漉き体験
時:2009年7月17日(金)～11月
場所:パピルス館(越前市新在家町)
越前市内小学6年生の卒業証書漉き体験

■越前和紙の里フェスタ
時:2009年8月1日(土)～16日(日)
場所:和紙の里通り(越前市新在家町)
カワソサン祭り、七夕まつり

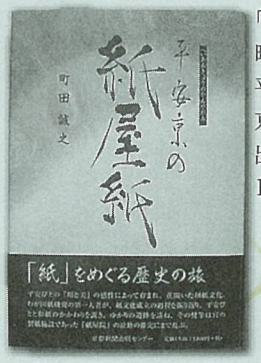
■福井の伝統工芸士展
時:2009年8月6日(木)～8月18日(火)
場所:東京都池袋　全国工芸品センター
即売、体験

■丹南産業フェア2009
時:2008年9月19日(土)～21日(月)
場所:サンドーム福井
和紙製品即売、体験コーナー

■国民会議全国大会・全国伝統工芸士大会
時:2009年10月28日(水)
場所:京都伝統工芸大学校他

■日本伝統工芸士会作品展・ふれあい広場
時:2009年10月29日(木)～11月1日(日)
場所:みやこめっせ／京都市勧業館

■新刊紹介



「平安京の紙屋紙」
町田誠之著
平成21年3月30日
京都新聞
出版センター刊
1800円(税別)

紙屋紙という名の紙が、特異な存在として評価を受けるのは平安時代に「紙屋院」という機構が完備されてからのことという。日本人、特に平安人に愛され花開いた和紙文化の軌跡を、紙研究の第一人者がたどった「紙」をめぐる歴史の旅。紙屋紙の生い立ち、使われた文学や絵巻、愛でた人々などが写真を交えて語られる。和紙の視点で捉え直すと、京都には紙にゆかりの場所が多くあるのも驚かされる。

編集後記
越前市大滝町でうちわ作りが始まりました。和紙の良さをアピールするのに、季節感のある、いい宣伝ツールだと思います。東急ハンズなどでも、プラスチックや竹のうちわの骨は手軽に安く手に入ります。子供達の夏休みの和紙工作にもいいですね。私もMyウチワを作ってみようかしら。(よ)

季刊・和紙だより 第23号(2009年夏号)　発行日:2009年7月1日
発行人:福井県和紙工業協同組合　山田益弘　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所:右衛門佐美佐子事務所　〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL: 075-712-8834　FAX: 075-702-6223　E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp
編集人:右衛門佐美佐子・田中裕子
※無断での転写・転載はお断りします。